



理事長 鱒見進一

社会連携・広報委員会委員長 北川善政

News Letter No. 13

今回は 2021 年 7 月 25 日(日)に行われた第 52 回一般社団法人日本顎関節学会学術講演会について、日立製作所京浜地区産業医療統括センタの澁谷智明先生に報告していただきます。

第 52 回一般社団法人日本顎関節学会学術講演会報告

「【顎関節症の専門治療】」

2021 年 7 月 25 日 zoom 形式開催

第 52 回学術講演会はテーマを「顎関節症の専門治療」と題し、2021 年 7 月 25 日に新型コロナウイルス感染症の影響を考慮して WEB (Zoom) にて開催された。まずは小見山 道学術委員会委員長 (日本大学松戸歯学部) から、今回の学術講演会は本学会の専門医を目指す先生方向けに、より専門的な内容となっているとの説明があった後、鱒見進一理事長 (九州歯科大学) より開催の挨拶があった。参加者総数は WEB での開催となったためか、181 名 (会員 : 170 名、非会員 3 名、研修医 : 6 名、学部生 : 2 名、申し込みは 202 名) と多数の参加があった。

まずはじめは、小林 馨先生 (鶴見大学歯学部) から「顎関節症の専門治療に必要な画像検査、画像診断」と題し、I. MRI、CT の画像解剖と顎関節症の画像所見、II. 顎関節症の画像診断の妥当性と信頼性、III. 画像所見による顎関節症の治療・管理目標の設定および IV. 顎関節症以外の顎関節疾患の画像診断について講演いただいた。

一般社団法人日本顎関節学会 第52回学術講演会
2021年7月25日 (日)
開催形式 : web (zoom)

【顎関節症の専門治療】
顎関節症の専門治療に必要な
画像検査、画像診断

小林 馨
鶴見大学歯学部
口腔顎顔面放射線・画像診断学講座
教授



本学会における顎関節症の病態診断において、顎関節円板障害と変形性顎関節症の確定診断は MRI と CT で行う。画像診断を行っていくには正常解剖像と病的像について理解し

ておくことが重要であるため、まず解剖体の写真を用いて解説された。

MRI は修正矢状断撮像で①プロトン密度強調 MR 画像と②T₂強調 MR 画像で見ていくことや各撮影画像についての説明、画像診断の妥当性と信頼性についてもお話しがあった。その中で下顎前突症の患者は画像によっては関節円板の位置が見にくくなり、正常な状態であっても前方転位しているように見えることがある、軟骨上の線維被覆を見るのは難しい、造影 CT と比較すると MRI では関節円板の穿孔や癒着を見つけることは難しい、ということが理解できた。

また治療・管理目標の設定において、非復位性顎関節円板前方転位が復位性に戻る可能性が高いのは「20 歳以下、円板の形が Biconcave、円板転位が中等度まで、骨変形がない」などの症例、Erosion が進行していくかは 2 年間の経過観察が必要、顎関節症以外の顎関節疾患として進行性下顎頭吸収など他疾患の観察に MRI 検査が有効であるといったことが小林先生らの研究から明らかとなり、新たな知見を得ることができた。

次に、小見山 道先生（日本大学松戸歯学部）から「顎関節症の慢性の痛みに関する考え方」と題して、I. 顎関節症の痛みについて II. 慢性疼痛についておよび III. 難治性の痛みへの対応について講演いただいた。

一般社団法人日本顎関節学会 第52回学術講演会

顎関節症の専門治療

顎関節症の慢性の痛みに関する考え方

小見山 道

日本大学松戸歯学部付属病院 顎関節・咬合科、口・顔・頭の痛み外来

2021年7月25日（日）WEB開催



顎関節症の一部の症例では痛みが慢性化して対応に苦慮することがある。国内の痛みに関連する学会の協働で「慢性疼痛診療ガイドライン」が今年改訂され、慢性疼痛に関するクリニカル・クエスチョン（CQ）とその回答、診療においてはその推奨度とエビデンス総体の総括が掲載されており、主なものの解説をいただいた。その中で腰痛などの慢性の筋・骨格系疼痛への対応で積極的な運動療法が推奨されており、顎関節症においても活用できると思われた。

また、「同ガイドライン」の委員長である仙台ペインクリニックの伊達 久先生が以前に講演された内容を顎関節症に置き換えて説明いただいた。その中で、①成育歴を聞くのが大切で、医療不信の強い患者は幼少期のいじめや虐待が多い、②失感情症ではストレスの身体化がストレス解消後に起きやすい、③診療には治療的対話が大切、④患者との信頼関係を築く基本は丁寧な診察・検査と基本治療である、といった話はとても興味深く思えた。機会があれば、伊達先生ご自身のお話しも是非聴講したい。

午後は、外科的な対応として「顎関節症の外科治療（パンピングマニピュレーションおよび顎関節上関節腔洗浄療法の適応とその意義）」と題して大井一浩先生（金沢大学）に、
I. 上関節腔穿刺に必要な局所解剖 II. パンピングマニピュレーションおよび顎関節上関節腔洗浄療法の術式と周術期管理およびIII. 本法の適応症とその意義についてご講演いただいた。



顎関節症の外科治療

-パンピングマニピュレーションおよび 顎関節上関節腔洗浄療法の適応とその意義-

大井一浩

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科外科系医学領域
顎顔面口腔外科学分野



上記2法は、日本顎関節学会編「新編顎関節症（改訂版）」において、顎関節症に対する基本的な外科的治療と記されている。外科療法を施行するには、まずその部位の解剖を熟知する必要がある。大学病院においても20年ほど前はパンピングや上関節腔洗浄療法を行う症例が多数あったため、私自身多くの症例を経験することができた。しかしながら現在の顎関節症の治療は保存療法がメインであり、専門医を目指す先生方が、両法に対して十分な修練を積むには症例数に限りがある。そのため適応に対する診断、安全な手技や術後管理の習得には工夫が必要と思われる、大井先生が話されたように、多くの成書を読んで両法に精通すること、指導医から実地指導を受けることが以前にも増して重要になっていると考えられた。

続いて顎関節症の外科治療「顎関節鏡視下手術および顎関節開放手術の適応とその意義」と題して川上哲司先生（奈良県立医大）にI. 顎関節鏡視下手術の適応、診断的・治療的意義 II. 顎関節開放手術の適応、治療的意義およびIII. まとめ（利害得失）についてご講演いただいた。

現在、多くの顎関節症において保存療法が初期治療として施行されているが、保存療法を施行しても奏功しない時、器質的な原因が明らかな場合は、救済手術として顎関節鏡視下手術や顎関節開放手術または顎関節鏡視下での顎関節開放手術が適応される。

川上先生からは小林先生や大井先生と同様にまず顎関節の解剖のお話があり、その後外科療法の変遷（開放手術と関節鏡）やご自身で使用されている関節鏡についての説明があった。顎関節鏡視下剥離授動術では動画を交えながらその病態診断や術式について分かりやすく解説いただき、しっかり適応症を選べば、その治療成績も良好であることが川上先生ご自身の研究結果から明らかとなった。また顎関節症の診断で関節鏡視を行ったが、実は

滑膜性骨軟骨腫症であったという症例では鑑別診断の難しさがあらためて理解できた。

顎関節開放手術においては、内側溝（Medial groove）が非常に見えづらいことは私自身経験してきたが、関節鏡を併用することで、それが解消できることをご教示いただき、有意義であった。



本講演会の最後は、和気裕之先生（みどり小児歯科クリニック）に「顎関節症の心身医学・精神医学的対応」と題して、Ⅰ．心身症、歯科心身症、身体症状症 Ⅱ．顎関節症と心身医学、難治症例 およびⅢ．歯科医師に必要な心身医療について講演いただいた。

日本顎関節学会 第52回学術講演会「顎関節症の専門治療」2021.7.25

顎関節症の心身医学・精神医学的対応

和気裕之



歯科医師は、全ての疾患を bio-psycho-social model で捉えて診る必要がある。そして、psycho-social factor の影響の程度は、各疾患で、また同一疾患でも各患者で、さらに同一患者でも時期により差があるため、それぞれを評価すべきであり、特定の疾患を歯科心身症であるとするのは誤りであるとし、先生が提案されている歯科心身症の定義について解説いただいた。

また、医療面接を行う上では、患者の解釈モデル、家族歴や家族関係などの背景因子を聞いていくことの重要性が、患者評価では、①自覚症状に見合う他覚所見が認められないケース、②他覚所見はあるがそれだけでは自覚症状を十分に説明出来ないケース、③身体疾患と精神疾患を合併しているケースと④心身症のケースに整理して対応していくことが大切であることがわかった。さらに実際、診療を行っていく上で医療連携の重要性も理解できた。

本講演での内容に加え、和気先生の多くの著書を読んで、歯科医師として心身医学・精神医学の知識をさらに学んでいきたいと思った。

現在、本学会ホームページに掲載されている「顎関節症治療の指針 2020」の診察・検査・診断および基本治療を行なうことで、多くの顎関節症の症状は改善する。しかしながらそれだけでは症状が改善しない難症例も一部存在する。専門医はこれらの症例に対しても対応しなければならない。鑑別診断も含め、器質的な問題において病態診断では MRI 画像の、治療においては外科療法の知識もある程度習得し（自分では行わない先生方も）、また慢性疼痛や心身医学・精神医学の知識も持って患者を診ていくことが大切であると思われた。今回の講演会はこれらの知識を学ぶ上で大変有意義な会であった。